

平成 21 年 4 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006 ～ 2008
 課題番号：18720014
 研究課題名（和文） 聖典解釈学を中心とするインド哲学文献の写本調査・原典批判・思想史研究

研究課題名（英文） A Text-critical study of Indian philosophical texts

研究代表者

片岡 啓 (KATAOKA KEI)
 九州大学大学院・人文科学研究院・准教授
 研究者番号：60334273

研究成果の概要：インド内外のインド哲学の古文書であるサンスクリット写本を広く調査し、コピー複写を蒐集するとともに、それらを生かした文献研究を行い、その成果を、テキスト校訂・訳注研究・思想史研究として学術雑誌等に公表しえた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	300,000	3,700,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学，印度哲学・仏教学

キーワード：印度哲学・思想

1. 研究開始当初の背景

インド哲学史を再構築する上での基礎資料となるのは、紀元前1000年より残るサンスクリット語（古くはヴェーダ語）の文献資料である。その量は膨大である。それは3000年という時間と、インド亜大陸という空間の広がり起因する。

ヴェーダの口承伝承は特別として、多くの哲学文献は、貝葉や樺皮あるいは紙に書かれた古文書の形で現在まで伝わる。サンスクリット語は、ヨーロッパにおけるラテン語のように、一地域に限定されない汎インド的な雅語として機能してきた。したがって、同じサンスクリット語の文献が、多くの地域で、それ

ぞれの地方の文字で書き残されてきた。

例えば、報告者の校訂した紀元後900年頃の哲学文献である『論理の花房』には、北西のカシミールのシャーラダー文字、北・中インドで広く用いられるデーヴァナーガリー文字、南西端のケーララ州のマラヤーラム文字など、数種の異なる文字による写本が残る。それら全く異なる文字——もちろんそれらは遡れば紀元前3世紀に姿を現したブラーフミー文字の子孫である——による各写本を参照した上でのテキスト校訂作業が必要となるのは言を俟たない。

しかし、これまでのインド哲学研究において、

そのような校訂作業は十分に行われてこなかったのが実情である。その理由は容易に理解できる。

校訂作業自体、膨大な時間を要する作業である。このような地味な作業に哲学を目指す「インド哲学者」が取り組みたがらなかったのは当然である。

また、異なる文字で書かれた多種の資料を読みこなすのは、容易な作業ではない。ブラーフミー文字に起源するとはいえ、北西端のシャラダー文字と、南西端のマラーヤラム文字とでは、見た目も中身も全く異なる。それらを正確に読んだ上で校訂作業に入るといふ敷居はかなり高い。

また、インド全国から写本を集めることの困難がある。19世紀末のイギリス人、インド人研究者の努力により、各地方では、大学図書館などが中心となり、それぞれの地方の旧家に伝わる古写本が精力的に購入あるいは書写された。その一部は、イギリス本国、たとえば、大英図書館やオックスフォードのボードレイアン図書館にも所蔵される。それら各地方の図書館を訪問するという作業には、時間と労力と財力が必要となる。

それら基礎資料をもとに、20世紀初頭、多くの基本的テキストがインドから出版された。しかし、多くの場合、一地方の系統の近い数写本だけを参照してテキストを作るといふことが行われた。系統の離れた他地方の写本を多く参照するという時間のかかる手順よりも、手早く基礎資料を出版するということに重点が置かれたのは、研究の初期段階において、当然の成り行きであった。

そして、その後、20世紀の後半になると、それらの成果を無批判に踏襲するということが横行する。他の写本も参照した上で、既存のテキストを訂正するという最低限必要な手順が踏まれることはまれであった。単なる丸写しの再版が、「批判校訂」として新たな校訂者名と新たな価格とともに、別の出版社から出されるということが、ほとんどである。

その結果、例えば聖典解釈学の『シャバラ註』の場合でも報告者が確認したように、最初に出版された一つの刊本を除けば、その後出版された多くの校訂本は、実際には、前の校訂本のコピーであるということが往々にしてインドのテキストにはある。これが、インド哲学研究のおかれた実情である。信頼できるテキストのあるほうが、むしろ稀である。

「読めればいい」というのが、実際のところ、これまでのインド哲学の多くの研究者の実感であったろう。しかし、そのような脆い地盤の上に堅固な思想史を再構築することはできない。

まず批判的なテキストは、その証拠が明らかでなければならない。すなわち、写本に何が書かれていたのか、異読を全て正直に挙げる必要がある。そうすることで、読者は、実際の写本に何が書かれてあったのか知ることができる。すなわち、証拠を吟味することができる。

その証拠の上に、読者は、校訂者とは違った読みを採用することも可能である。すなわち、批判的な校訂テキストは「開かれたもの」となる。これにたいして、異読を挙げないこれまでの自称「校訂」本は、「閉じられている」。なぜならば、そこには、読者が自由に吟味することのできる証拠が挙げられていないからである。読者は、提示されたテキストを「信じる」しかない。

発展のある学問として文献学を成立させるための基礎作業が、批判的な校訂作業であることは言を俟たない。その作業をおろそかにしながら、あるいは、内心その必要を感じながらも等閑視してきたのが、これまでの多くのインド哲学研究である。

しかし、現在、状況は大きく変わってきた。インド旅行、あるいは、イギリス旅行は容易になり、個人でも写本蒐集が可能になった。批判的な研究において、写本を用いた文献批判の作業の必要性が広く認識されるようになってきた。研究の水準は確実に上がっている。

特に、インド哲学文献に関してはテキスト批判が不可欠であり、そのために写本の蒐集作業が必要である。本研究ではインド内外の写本図書館に所蔵される写本を幅広く調査・蒐集し、それら一次資料を基に原典校訂・訳注研究等、文献研究のための基礎作業を開始した。

2. 研究の目的

報告者が研究の中心とするのは、バラモン教学の一派であるミーマーンサーという聖典解釈学の伝統である。その周辺には、認識論や論理学を扱うニヤーヤ学派や仏教もある。

特に研究の中心にすえたのは、紀元後6世紀頃のシャバラ、紀元後7世紀頃のクマーリラとダルマキールティ、紀元後9世紀頃のジャヤンタという学者である。彼らの思想史上

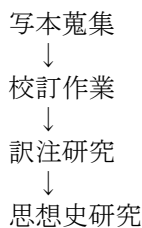
の位置を確定する作業は、いまだ不十分であり、不確定要素は、年代論も含め、実に多い。

インド哲学文献の中身は、議論応酬の上に成り立っている。したがって、論争史を丹念に追うことが必要である。一学派にとどまっているのは、思想史上の発展は見えてこない。学派間交渉を追うことで見えるものが多くある。

報告者の最終的な目標は、バラモン正統派の教学の一つである聖典解釈学ミーマーンサーを中心とするインド哲学文献の文献学的研究のための基礎固めである。そのために、文献批判・訳注研究・思想史研究を地道に行うことを目標に掲げた。

3. 研究の方法

研究の方法としては、



という体系だった実証的な文献学の研究方法を意識的に用いることが重要と考える。

まず、インド内外の写本図書館に所蔵されるサンスクリット写本の調査および複製蒐集を行う必要があるのは当然である。

そして、それら入手した写本を基に、テキスト校訂の作業を行うことが可能となる。具体的には、紀元後6世紀の『シャバラ註』と、紀元後9世紀の『論理の花房』に焦点を絞り、校訂作業に入る。校訂作業にあたっては、テフのプログラムを用いた複数段の校訂本を論文の形で公表することを目指す。

そして、それら信頼できるテキストの上に、訳注研究を行うことが可能となる。すなわち、自身が新たに再校訂したテキストの上に、詳細な脚注を付した和訳研究を責任をもって公表することを目指す。

またそれらの基盤に立って思想史研究を行うことが可能となる。

いずれも、個別論文の形で、出来上がった成果から順次公表することを目指す。また、テキスト校訂については、解題を英語で付し、本邦のみならず世界に広く成果を公表することを図る。

4. 研究成果

数多くのサンスクリット写本を複製するとともに、それらを電子データ化するなどして、資料整理を図った。同時に、それら基礎資料に基づいて原典校訂を行い、その成果を順次、学術雑誌に発表しえた。また校訂したテキストについては、順次、訳注研究を公表することができた。それら基礎的な文献研究から分かった思想の交渉史に関しては、個別論文の形で発表しえた。

(1) 写本調査および蒐集

写本調査に関しては、インドおよびネパールの写本図書館を訪問し、それらの写本を直接に調査するとともに、複製可能なものについては複製、あるいは、撮影を行った。

具体的には、インド文化の古い要素を多く残すネパールに残るサンスクリット写本の蒐集を第一に行った。現在、仏教研究やシヴァ教研究に顕著なように、ネパール写本は多くの重要な資料を提供する。それは、ネパール・ドイツ写本保存プロジェクトの成果による。すなわち、ネパールに残された多くのサンスクリット写本が体系的に撮影され、カトマンドゥにおいてマイクロフィルムの形で保存され、公開されている。その公開の直接的な研究成果が現在、陸続と論文などにおいて公表されつつある。

ドイツ人研究者はドイツ本国から複製を入手できるが、日本人研究者は、直接カトマンドゥに赴き、マイクロフィルムの複製を入手するしかない。したがって、実際の訪問作業が必要となる。報告者の蒐集作業の第一は、このネパール訪問、写本複製の入手に始まる。

また、南インドの写本に関して、ポンディシェリの極東学院は、特に貝葉写本（神学文献、儀礼文献など）のコレクションで知られる。そこでも、直接に資料を調査することができた。

そのほか、南インドからは、チェンナイのアーディヤール図書館、および、ケーララ大学図書館に所蔵されるインド哲学文献の写本等を入手することができた。

(2) 資料整理

こうして蒐集した貴重な一次資料については、マイクロフィルムの紙焼き、製本、さらに、デジタル化を行い、資料整理を図った。

(3) テキスト校訂

写本に基づくテキスト校訂にあたっては、

TeX プログラムを用いてインド文字および複数段の脚注により複雑な異読表類を付したテキスト校訂本を作成、順次、それらを雑誌に公表した。すなわち校訂テキストは、

- (i) テキスト本文
- (ii) 平行句・引用など
- (iii) 異読表

から構成される。

(i) テキスト本文は、校訂者（本報告者）の採用した読みを載せる。テキスト校訂にあたっては、内容に沿って校訂者自身が最適と考える段落分けを行い、それぞれに、校訂者自身が付けた副題を付した。すなわち、段落分けと内容見出しをつけた。科文をつける作業である。

また、サンスクリット写本には、句読点は通常記されていない。単に写本情報を再現するだけでは、文章は区切ることができない。したがって、校訂者には、解釈まで踏み込んだ段落分け、分節、文の区切りが必要となる。それらについては意識的に行った。これは、哲学文献の読解のためには特に重要な作業と考えられるからである。校訂作業は、写本情報の単なる再現ではない。

(ii) 引用や平行句、あるいは、註釈文献における重要な証拠など、校訂や解釈にあたって重要なパッセージについては、中段に注記した。

(iii) 最終段は、校訂の要となる異読表である。校訂作業に用いた全ての写本情報について、一部の瑣末な正書法上の微細な違いは無視するとしても、解釈上重要となる異読については、余すところなく記した。

このような複雑な校訂作業は、ワードなどの通常のワープロ・プログラムでは不可能である。ワードの註釈機能は、本文と注記の二段組しか予想しておらず、しかも、番号の異なる注記も上につめることができず、改行が多くなってしまふからである。ワードで校訂作業を行えば、本文一行にたいして、異読表が30行、しかも、異読表の右は空白、という醜い校訂本が出来上がることになる。

校訂作業用に海外で開発された edmac という

プログラムをテフの上で用いることで、この問題は解消された。すなわち、複雑な段組と、本文と異読の対応付け、異読表を改行なしに上あるいは左に詰めることが可能となった。

またオランダの Groningen 大学のスカンダブラーナ校訂プロジェクトのために開発されたデーヴァナーガリー文字フォントを用いることで、コンピューター上で、インド文字をそのまま出力することが可能になった。

インド人研究者は、ローマ字化されたサンスクリット文献を読むことはまずない。ローマ字にかえて、デーヴァナーガリー文字で公開することの意味はここにある。すなわち、インド人研究者も含め、広く成果を公開することができるのである。デーヴァナーガリー文字による校訂のほうが、公開性という意味で優れている。

報告者の校訂本がいずれもインド文字によるものであるのは、このような点を考慮した上でのものである。

また、テキスト校訂については、いずれも英語による解題・解説を付し、その成果を世界的に広く公開することが出来た。いずれも Cini 等により、インターネットでダウンロード可能である。

(4) 訳注研究

自身が校訂したテキストに基づき、責任をもって、それらの訳注研究を順次、紀要などに公開することができた。

「訳注よりも、議論を展開した論文を書くべきだ」という意見を耳にすることがある。しかし、インド哲学文献は、それぞれの専門性が極めて高いものである。というのも、インド哲学文献の作者は、一部の専門家を相手に著作を著しているからである。一般大衆に広く教えを説くために著作を著しているわけではない。専門家が専門家に向けて書いたものである。

したがって、テキストが校訂されたとはいえ、その内容は他分野のインド哲学研究者が容易に理解できるものではない。広く成果を共有するためにも、詳細な注記を付した和訳研究という基礎作業は必要不可欠である。意味のある議論は、そのような基礎作業の上に可能となるものである。

報告者の行った箇所については、不十分な英訳や、ヒンディー訳あるいはグジャラーティー訳はあるとはいえ、それらは誤った読みを多く含む先行刊本に基づくものであり、また、

詳細な注記を付したものでない。インド人研究者による翻訳に多くあるように、きわめて達意的な翻訳である。原文のサンスクリットとの対応を十分に反映した翻訳というのは見られない。

インド哲学研究の現在の水準を考えたとき、西洋哲学と平行に考えることは危険である。自らの頭で考えた哲学を展開するという段階にはいまだ、インド哲学はないと断言できる。テキスト校訂は言うに及ばず、信頼できる翻訳もない。スタンダードが存在しない世界である。訳注研究という地味な作業の意味は明白である。

(5) これらの基礎的な文献研究の中から浮かび上がってきた思想史の新たな知見に関しては、個別論文の形で学術雑誌などに公表することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13件)

① 片岡啓, 神を否定する方法: Nyayamanjari 「主宰神論証」前主張部の読解, 『哲学年報』(九州大学文学部), 68, 27-71, 2009, 査読無

② 片岡啓, 「印哲」は何を目指してきたのか?, 『南アジア研究』, 20, 142-159, 2008, 査読無

③ 片岡啓, A Critical Edition of Bhatta Jayanta's Nyayamanjari: The Section on Kumarila's Refutation of the Apoha Theory, 『東洋文化研究所紀要』, 154, 212(1)-182(31), 2008, 査読無

④ 片岡啓, Tattvatrayanirnayavivrti和訳, 『南アジア古典学』, 3, 275-310, 2008, 査読有

⑤ Dominic Goodall, Kei Kataoka, Diwakar Acharya, Yuko Yokochi, A First Edition and Translation of Bhatta Ramakantha's Tattvatrayanirnayavivrti, 『南アジア古典学』, 3, 311-384, 2008, 査読有

⑥ 片岡啓, ジャヤンタによる論理学の位置付け: Nyayamanjari 「序説」和訳, 『哲学年報』(九州大学文学部), 67, 55-90, 2008, 査読無

⑦ 片岡啓, A Critical Edition of Sabarabhasya ad 1.1.6-23:

Sabdanityatvadhikarana, 『東洋文化研究所紀要』152, 580(29)-530(79), 2007, 査読無

⑧ 片岡啓, Kumarila's notion of pauruseyavacana, Rivista di studi sudasiatici II, 39-55, 2007, 査読無

⑨ 片岡啓, Pramanasamuccayatika ad 1.1 和訳, 『南アジア古典学』2, 1-79, 2007, 査読有

⑩ 片岡啓, Was Bhatta Jayanta a Paippaladin?, The Atharvaveda and its Paippaladasakha. Historical and Philological Papers on a Vedic Tradition. Ed. A. Griffiths & A. Schmedchen. (Indologica Halensis) Aachen: Shaker Verlag, 313-327, 2007, 査読無

⑪ 片岡啓, Critical Edition of the Sastrarambha Section of Bhatta Jayanta's Nyayamanjari, 『東洋文化研究所紀要』150, 204(123)-170(157), 2007, 査読無

⑫ 片岡啓, 正しい宗教とは何か——Bhatta Jayanta作Nyayamanjari「聖典権威章」和訳——, 『哲学年報』(九州大学文学部) 66, 39-84, 2007, 査読無

⑬ 片岡啓, Bhatta Jayanta on the Purpose of Nyaya, 『南アジア古典学』1, 147-174, 2006, 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 啓 (KATAOKA KEI)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号: 60334273